

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成30（2018）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 北海道大学（センター長/教授・加藤 博文）

研究交流課題名 文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築

評価結果（総合的評価）

- |   |  |
|---|--|
| ○ | A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。                    |
| ○ | B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。       |
|   | C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。                |
|   | D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題は、日本統治下時代の台湾や、植民地支配等と関わるアジア・オセアニア・欧米の実績のある研究交流拠点と連携し、世界的にも研究対象領域として関心の高いテーマである。3年間にわたる事業は、おおむね計画通りに順調に進み、計画当初通りのネットワークの体制が構築できている。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴い事業の延期等がなされているが、オンラインセミナーでの代替にも取り組んでおり、コロナ禍のため遅れている点も、その準備はすでに行われており事業後半で進める具体的計画が示されているので、それに期待したい。

研究交流活動としては、国際セミナーの開催やフィールドワークによる資料調査や討議といった若手研究者の共同研究の機会が設けられるなど着実な成果が認められる。そのために綿密な打ち合わせがなされたことも評価できる。セミナーで培われたネットワークが継続的に開催されることで、研究領域の拡大と深化が見込まれるが、まだ中間地点でもあり参加者数に比して論文の本数が少ないところはある。

若手研究者育成については、独自性を有するフィールドを介した育成プログラムが機能し、若手研究者間の交流も活発化しつつある。多くの若手研究者、大学院生が参画しており、学びの場としての機能が果たされているだけでなく、今後の継続性も期待される。ただし、日本開催の国際フィールドスクールは、海外開催のほかのセミナーが先住民に関する議論を活発に行っている点と比べると、本研究目的にある先住民に関する研究との関係が不明であり、来日した研究者が先住民を理解し合う設定が必要でないかと考える。